

課題研究につながる障害理解の発展的プログラム： 「ともにいきる」講座の実践報告 第3報 とまとめ

著者	早貸 千代子, 菱山 玲子, 吉田 哲也
雑誌名	筑波大学附属駒場論集
巻	56
ページ	179-198
発行年	2017-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150928

課題研究につながる障害理解の発展的プログラム

－「ともにいきる」講座の実践報告 第3報 とまとめ－

筑波大学附属駒場中・高等学校 養護教諭

スクールカウンセラー・化学科

早貸千代子・菱山 玲子・吉田 哲也

課題研究につながる障害理解の発展的プログラム

－「ともにいきる」講座の実践報告 第3報 とまとめ－

筑波大学附属駒場中・高等学校

養護教諭*1・スクールカウンセラー*2・化学科*3

早貸千代子*1・菱山 玲子*2・吉田 哲也*3

要約

本校では、障害（者）への関心を一層高め、誰もが住みやすい社会を構想し、それを実現するための知性と感性そして原動力を培う機会と場として「ともにいきる」講座を開講している。今年度は第4期を開講した。講義・交流・擬似体験等を通して受講生は障害（者）に対する「見方・捉え方」が変容したのみならず、気づきや体験談等を講義外でも語り合う姿が見られ、クラスメイトや後輩への影響が広がった。その他、この講座から発展的に様々な活動へ参加する生徒も生まれた。本報告では、今までの経過・報告、及び受講生のレポート・1年後の振り返りアンケート、高3 課題研究論文をもとに、本プログラムの内容及び発展性と今後の課題を述べていく。

キーワード：障害理解・共生社会・課題研究

1 はじめに

今年度（2016年）は4月に障害者差別解消法が施行され、障害者に対して合理的配慮をし、障害者にとって社会的障壁や過度な負担がなくなる社会の最初の年となった。東京都福祉保健局でも「ともに話し、ともに学び、ともに働き、ともに暮らし、ともに生きる」を謳い、冊子「ともに生きる TOKYO」を発行した。さらに連動して、大学や民間団体等との協賛で「心のバリアフリー・情報バリアフリー研究シンポジウム」が開催され、大学生を中心に、整備基準が明確なハード面だけでなく、ソフト面のバリアフリーを考える研修会・シンポジウムも行われている。

一方、同年7月には相模原で痛ましい事件が起きた。この事件で、日本が障害者や弱者を隔離し困り込むことに専念してきた歴史・背景が垣間見られた。「障害者は生きる価値がない」という思想が、少なくともネット上では、少なからず賞賛され、賛意を露にするものが少なくなかった¹⁾。今もなお、「命を優と劣にわけ、優なる命を増やし、劣なる命を減らす、そのことで国家や社会の益とする」思想²⁾や、「優秀な人間や健常者は生きる意味があるが、障害者は無意味だ（役立つ障害者だけが生きる意味がある）」³⁾という優生的な価

値観・功利主義・他者排除が社会の根底にあることを感じずにはいられない。

このような思考・思想の背景には多くの要因が含まれているが、一因として、障害者とともに生活する機会が少なく、障害者に対する想像力が働かないことがあげられるだろう。障害に対する知識・経験の不足は、「自分とはかけ離れた存在」「不自由でかわいそう」「常に援助が必要」等といったステレオタイプの認識を持ちやすい。結果、誤解や偏見が生じ、障害者のことを自分とはかかわりのないことだと捉えてしまう。このような社会の風潮こそが障害者やその家族にとって生活しにくい社会になっているのではないだろうか。

これからの社会を担っていく高校生たちが、障害（者）に思いを馳せ、障害がある人やその家族が抱える真の障害は何なのかを知り、誰もが住みやすい社会とはどのような社会なのかを自分自身の問題として考究し、今までの自分やこれからの社会を見つめ直すことは重要である。また、それは結果的に大きな社会貢献につながるかと筆者は考える。

本校では、2011年度から、高校2年生を対象に「ともにいきる」講座を開講し、障害の特性を始め、サポート方法、障害者の不便性・困難性・心情、障害者をめぐる状況等の理解を深め、すべての人が共に支え合

う社会を探究する機会を設けた。今年度は第4期となった。

受講生の感想・レポート及び日常生活から、障害(者)に対する認識に変容がみられ、障害(者)を理解しよう、触れ合おうという積極的な行動をする生徒が増えてきている。

本報告では、2016年度プログラムと受講生の感想、及び2015年度受講生の修了後レポートと1年後の振り返りアンケート、さらに2015年度受講生のうち希望者が選択した高3課題研究論文をもとに、本プログラムの内容及び発展性と今後の課題を述べる。

2 課題研究「ともにいきる」の概要 (2016年度)

2.1 教育課程上の位置づけ

本講座は、高校2年次の「理科課題研究」/「課題研究(学校設定科目)」(1単位)として実施している。本年度は9講座が開講され、教科の枠にとらわれず授業で学べない内容をより深く探究できるよう展開されている。生徒は、オリエンテーションにて各講座の特徴・内容を聞き、1講座を選択する。

2.2 実施日

土曜日と期末試験後に年間最大11回開講している。

- ・土曜日(月1) 8回(1回2~4時間)
- ・各期末試験後 3回(担当者裁量)

2.3 講師及びテーマ

講師として、筑波大学障害科学専攻の教授や、筑波大学附属学校の教員や児童生徒・卒業生及びご家族、都立の特別支援学校の先生に協力いただいた。

テーマは、毎回異なり、聴覚障害・視覚障害・知的障害・発達障害・自閉症・肢体不自由となるべく多くの障害を学ぶことができるようにした。

2.4 ともにいきる講座の特徴

オリエンテーションにて示した講座の内容は以下のとおりである。(原文)

障害者をかかわりそう、助けてあげよう、という対象として見ていないだろうか? 障害って何だろう? 普通って何? 障害は個性? 障害がある人もない人も共に生きるとは? 障害という先入観が見えなくさせているものはないだろうか?

障害者の経験する困難の原因は、手足や目・耳が「不自由」であることからもたらせるのではなく、社会のしくみによってもたらされる側面も大きいと言われています。

本講座はそれぞれの障害の特性を学ぶだけでなく、社会のしくみによる障害や人と人にある心のバリアについても学んでいきます。また、障害のある人の生きづらさや、何ができて何ができないのか、本当に必要なサポートは何か等を疑似体験や交流を通して理解を深めることができます。

この講座で真の障害とは何かを知り、障害のあるなしにかかわらず、お互いを尊重し合って共に支え合う社会づくりのきっかけになればと思っています。

【講座の特徴】

- ①筑波大学附属特別支援学校(視覚・聴覚・桐が丘・大塚・久里浜)の先生や卒業生が講師。障害種別すべてに対応した我が国最大の障害科学系教育機関である筑波大学附属学校ならではの講師陣!
- ②机上の講義だけでなく特別支援学校等へ訪問し、児童・生徒たちと交流や障害疑似体験などを通して、障害理解を深め、かかわり方の基本を学びます。
- ③障害のある本人(肢体不自由)やご家族からお話を聞く機会があります。
- ④東京大学先端科学技術研究センターの福島智教授[全盲ろう、附属聾学校(現附属視覚特別支援学校)卒]、熊谷晋一郎准教授(肢体不自由・小児科医)による講義、指点字の体験。
- ⑤附属聾学校(現附属聴覚特別支援学校)の卒業生が経営するcafé♣(店内は日本手話が公用語)へ訪問。
- ⑥有志のみ参加(数名) 7/27-7/29に黒姫高原にてインクルーシブ合宿を予定しています。

2.5 年間プログラムの内容及び日程

年間プログラムは講演・疑似体験・交流及び共同学習の3部構成とし、教育・交流・社会・研究・医学の視点からアプローチできるよう考慮した。

各回のテーマや授業形態は、講師に本プログラムの主旨と受講生の志望動機を伝え、一任している。

2016年度のプログラム及び日程は以下のとおりである。

【オリエンテーション 5/ 9】2時間

テーマごとのプレゼンテーション
(各10分間)

【第1回 6/11】2時間

筑波大学 副学長 宮本 信也先生
「障害とは」発達障害を通して理解する

【第2回 6/25】4時間

桐が丘特別支援学校 城戸 宏則先生
「肢体不自由とはどういう状態なのか」
「車椅子の疑似体験」
A君・B君(高3) (車椅子生活)
とご家族からの話

【第3回 7/ 8】3時間

日本ろうあ協会制作の映画鑑賞
「ゆずり葉～君もまた次のきみへ～」
「車椅子体験(車椅子で校内を移動)」

【第4回 7/14】1日学校訪問(現地集合)

聴覚特別支援学校 鈴木 牧子先生
「口話・読話について」
「難聴疑似体験」
高等部1-2年生徒
「ランチセッション」
「交流会」

【第5回 9/10】2時間

視覚特別支援学校 寄宿舎指導員
飯島 美帆先生・松田 有加先生
「視覚障害について」
「弱視疑似体験」

【第6回 10/15】2時間

都立墨東特別支援学校いるか分室
佐藤 比呂二先生
「自閉症の子どもたちとのかかわり」
「小児がんの子どもたちとのかかわり」

【第7回 11/12】3時間 先端研訪問学習

東京大学先端科学技術研究センター
福島 智教授〔附属盲学校

(現視覚特別支援学校)卒業]

熊谷 晋一郎特任講師

「当事者としての視点を大事にされた講話」

「相模原事件から考える」

「指点字・点字タイプライター体験」

【第8回 12/19】3時間 訪問学習

ありがとうの種 &

-Social Café-sign with me オーナー

柳 匡裕氏〔附属聾学校

(現聴覚特別支援学校)卒業]

「ろう者が起業するということ

～当事者問題をビジネスで解決する～」

(柳氏の講演は日本手話通訳あり)

「カフェ(店内の公用語は手話)で食事」

【第9回 1/14】3時間

大塚特別支援学校(小学部)本校へ来校

「科学実験とジャグリングを一緒に楽しむ」

(科学実験:東大CASTと本校科学部)

(ジャグリングショー

:本校ジャグリング部)

【第10回 1/28】2時間

大塚特別支援学校 校長 柘植 雅義先生

「障害とは何か?」

「グループワーク・発表」

【第11回 3/13】2時間

筑波大学 鈴木 健嗣先生

「人を支援する工学技術」

「グループワーク・発表」

2.6 受講生数

受講生は21名(164名中)であった。

2.7 受講生の志望理由

講座を決めるにあたり、生徒は9講座から第2希望までを選択し、志望理由を提出している。

本講座の志望理由をみると、自分の不自由さ(弱視、左手)などの経験から障害者の不自由さをもっと学びたい、将来の職業選択を考えるきっかけにしたい、疑似体験や交流から障害の意味を知りたい等、意欲的な内容が多かった。なかには、過去に障害のある子とのかかわりがあったにも関わらず、どこか“違い”を感じたまま、心にわだかまりを抱えており、この講座を学ぶことで自己理解・障害理解ができるのではという期待感を持って志望する者もいた。

また、「ともに生きる」のゼミ受講の上級生が多い

て、とても楽しそうに感想を言い合っているのを見て、「とても充実したゼミだな」と興味を持って志望した生徒もいた。これは受講生が講座以外でも講座内容や体験談を語っていることを物語っている。このことより、学年を超えて本講座が認知されていることが明らかになった。

その他のキーワードをピックアップしてみると、「筑波大学附属学校の利点を生かした講座」「書物では紐解けない内容の講座」「障害者とのかかわり」「実体験（擬似体験や交流）」「障害教育への興味」「特別支援学校と普通学校の違い」「障害者と健常者との距離」「障害者が社会に出ることの意味と支援」「自分たちに求められているもの」「社会的弱者への貢献」「自己の成長」等、多岐にわたった。これらからも障害への関心の高さ、本講座への期待感がわかる。

以下、それ以外の生徒の志望理由を紹介する。

（以下、下線は筆者）

【本講座への期待を述べたもの】

- これからの社会で、どんな職についても、障害のある人と関わる機会は多くあるが、「障害を学ぶ機会」はないと思った。（多数）
- 障害について意識することは普段ないが、障害者の問題は時代が変わっても永遠になくならないと考え、深く学ぶことが必要だと思った。
- 障害者の抱える事情や気持ちを少しでも知りたいと思った。一方で、障害者の方々に我々の普段考えていることや思っていることを知ってほしいと思った。この講座をきっかけに、自分の意識や認識が変わるような取り組みをしたい。
- 彼らがどのようなことを幸せと感じ、苦痛に思い、日々を過ごしているのかを、彼らと直接会話して知りたい。
- 障害を持つことがどれほどのことなのかを理解できていないから、健常者は障害を持つ人を敬遠してしまう。障害のある方との交流・擬似体験を通して、障害の意味をより深く知りたい。
- 将来、小児科医や障害者に対して治療をする医者、または官僚になって社会制度を変えることによって、社会的弱者に貢献したい。

【本講座の魅力を述べたもの】

- 筑波大学附属学校の利点を生かしたこの講座が最高の環境。
- 課題研究という従来の枠を超えた教科ではできないことがしたい。

【エピソードを述べたもの】

- 知的障害を持つ友達は、学年が上がるにつれ、1週間のうちの半分以上を別の特別支援学級で過ごしていた。当然のように「それは仕方がないことだから」と思っていた。今になって、どこか心に引っかかるものがある。

2.8 受講前アンケート

初回（2016.6.11）の講義前に、「今までの障害者とのかかわりの有無」及び現時点での「障害者へのイメージ」について、事前アンケートを行った。結果は以下のとおりである。

2.8.1 今までの障害者とのかかわり

受講生 21 名中、今までに障害者とかかわりがあった者は 15 名（71.4%）であった。クラスや部活動で一緒だった者は 4 名、特別学級での交流が 4 名、近所・知人とのかかわり 4 名、小学校の特別授業の講師 1 名、親族に 2 名であった。

2.8.2 障害（者）へのイメージ

①かかわりがあった人の障害者イメージ

今までにかかわりがあった 15 名の障害者に対するイメージは両極に分かれており、かかわり方がわからない・難しそうと否定的なイメージを持っている者が 10 名（下記◆）であった。

以下、受講生のイメージである。（原文）

- 特にイメージといえるほど特別なものはない。
- 障害のある人自身にとってはそれが普通だから、他人との違いをどれくらい認識しているのかわからない。配慮が難しい。
- 他人の発言の裏を読み取れない。体が弱い人が多い、素直、集中力があるときもあればないときもある。
- 一部に満足でない機能があるというだけで健常者と同じ人間。
- ◆ かかわるのが難しそうとか、大きな配慮が必要で負担が大きそう。
- ◆ 集団行動が苦手なイメージ。
- ◆ 価値観が自分達とは少し違う。外国人のようなイメージ。
- ◆ 他の人と関わりを持つことが難しい一方で、多くの助けを必要としている印象。同じ年でも年下の子と接するように接してしまう。

- ◆劣っている、遅れている部分がある。
- ◆話が通じていないと思うときがある。
- ◆元気、あまり話が通じないし、結果的に一步引くことになる。
- ◆周りの人が支援する必要があるとよく言われているし、それもわかるけど、ただ手伝うだけでは相手も露骨に感じて嫌がることもある。
- ◆学校教育ではほとんど触れられない。どうやって接すればよいのかわからず、あまり支援を受けられていない。

②かわりがなかった人のイメージ

- ・障害のない人の能力グラフ（バランスがよい○）、障害のある人の能力グラフ（凸凹）
- ・一種の特徴。これというイメージはない。
- ・知能が遅れている。またある分野において普通の人よりも優れていることがあることが多いというようなイメージ。
- ・身体や発達などに障害がある人。社会的な配慮はまだ不十分だというイメージ。
- ・社会を生きていくうえで苦勞しているようなイメージ。
- ・知的障害...話が通じない、1人でブツブツ言っているか、突然大きな声を出したりする。

2.9 各回の受講後のレポート

毎回、講座後には感想・意見・質問などレポート提出を義務付けた。これは講師へのフィードバック及び講座の理解度を図ることを目的としている。

本報告では、第1回宮本信也先生、第4回車椅子生活の高校3年A・B君とその家族及び城戸宏則先生、第6回佐藤比呂二先生の講義内容と生徒の感想を紹介する。

2.9.1 【第1回 6/11】発達障害

筑波大学 副学長 宮本 信也先生

「障害とは」発達障害を通して理解する
自閉症スペクトラムを中心に

<講義内容> (スライドのタイトルから)

「発達障害における発達問題とは」「非定型発達特性から見た発達障害の分類」「自閉症スペクトラム症とは」「自閉状態に対する考え方の変遷」「知能障害のないASDの特徴」「想像することの苦手さ」「なんか話が通じない→言葉の意味」「生活上の支障→適応行動の問題」「発達障害のある人は私たちとは違う

人?」「発達障害の成因」「遺伝特性から見た発達障害の特性」「非定型発達特性は障害ではない」「障害の状態は変えられる」等

宮本先生は発達行動小児科学が専門の小児科医である。“小児科医は、病気を扱う他の診療科とは違って、健康な子どもの成長を見るのが本来の業務”という立場から、子どもの言葉・社会性の発達について話があった。発達障害は、発達の遅れ・偏り・歪み等の発達特性だけでなく、時代・文化・社会の中で年齢相当に期待される活動ができずに生活上に支障が出ている、適応行動に問題がある「状態」であり、病気ではない。したがって、障害特性の理解と周囲の配慮や対応が大切であることを学んだ。例えば、マイペースで自分のことばかり話をしてしまい友達ができないという「状態」になっている子どもに対し「人と話すときには自分は話をしない」というルールをつくる事によって、友達ができるようになったという事例の紹介があった。このように本質は変わっていないけれどもやり方を変えることによって不適応が起きなくなる等の具体的なお話があった。

また、自閉スペクトラム症では「想像することが苦手」で「目の前に示されていない事柄を考えることが苦手」という特性ゆえに表面的な理解になって、とんちんかんな応答になっていること。「抽象的・象徴的事柄の理解が苦手」ゆえに、自分が体験した範囲で言葉を理解し使用しがちだが、周りはそのズレに気づきにくいこと等、目に見えにくい特性について、わかりやすい説明とそれに対する配慮の仕方等も聴くことができた。その他、医学的な知見、発達障害の考え方の変遷、遺伝特性や環境因子など、本校生徒の知的好奇心に合わせた講義であった。

講義後も受講生から多くの質問が出て、自閉スペクトラム症に対する関心の高さを感じた。

受講後の感想をみると、「今まで抱いていた障害(者)に対する概念そのものが払拭され衝撃を受けた」等の障害の認識・理解に変化がみられた。また、「『社会が障害を作る』ということは、逆に言えば『社会が障害をなくせる』ということだと思う。寄り添い、支援することで“障害”という言葉が存在しない世の中になるのではないかと、そしてそうやってほしいと強く思った。」と障害理解を社会に広めたいと考える受講生もいた。彼らの記述から、障害特性や対応を理解することで、誤解や偏見をなくし、相手に寄り添う心が芽生え、さらには、社会全体の障害理解の必要性を考え

るようになることが明らかとなった。

以下、それ以外の生徒の感想を紹介する。

【受講前の障害のイメージを述べたもの】

- ・ただ単に、他の人より発育が遅れている。
- ・障害はデメリットしかない。
- ・あまり話が通じない。
- ・発達障害は治らなくて、不自由な生活を強いられ、可哀そう。
- ・障害は僕らには手が負えないもの。

【障害に対する認識・理解を述べたもの】

- ・障害の定義の難しさを知った。
- ・小説家や芸術家には障害がある方もいて、むしろ才能が特化されていることが分かった。
- ・言葉のコアイメージを理解しづらい自閉症の人にとって、多くの言葉が省略されている我々の日常会話は意味が通じなかったりするというのが印象的であった。

【障害の理解の必要性を述べたもの】

- ・自分達が勝手に「ASD」と思っているだけで、社会的に生きづらくなっている現状はおかしい。より多くの人に知ってもらいたい。
- ・発達障害の特性が見られたとしても、周りの対応次第ではそれを「障害」ではなくすることができるかもしれない。何が問題になっているのか、理解できるようにになりたい。

【その他】

- ・自閉症の特長は自分にも周りの人にも当てはまる点がたくさんあった（多数）
- ・今までの自分の話し方を直せば普通に話せると分かった。自閉症の親類がいるので、学んだことを生かしたい。

2.9.2 【第2回 6/25】 肢体不自由

桐が丘特別支援学校 城戸 宏則先生

「肢体不自由とはどういう状態のなのか」

「車椅子の擬似体験」

A君・B君（高3）とご家族からの話

今年度は、同世代（高3）で車椅子生活をしている2人、A君（脳性麻痺・知覚認知障害）とB君（脳性麻痺・構音障害）とそのご家族から話を伺った。それぞれの障害の特性、日常生活や学校の様子、ICTを活用した教材、趣味や将来の夢、ボッチャ・シットスキー・ハンドサッカー等肢体に不自由があってもでき

るスポーツを楽しんでいること、世の中のちょっと惜しい支援や社会の現状（ハード面として駐車場、エレベータ、駅構内地図、本校のバリア）等、多岐にわたる話があった。

城戸先生からは肢体に不自由がある人の「認知や感覚」の特性や「動作や姿勢の不自由さ」等、専門的な立場からの説明があった。また、障害への理解と援助・思いやりの強要はしないというスタンスで、「必要以上に無理な自己犠牲をしなくてもよい」とのアドバイスがあり、障害理解の上で大事な視点を学ぶことができた。

今年度は、後半に受講生から一人ずつ自己紹介を兼ねて質問をし、直接本人やご家族から回答をいただく時間を設けた。「食事で配慮していることは？」「友達同士のコミュニケーションはどうしているのか？」等、本人やご家族の生の声を聴くことができた。双方向にやりとりができるこのスタイルは、両者の距離が縮まり、有意義な時間となった。

受講後の感想をみると、話を聴く前は「肢体不自由・車椅子生活」は「何もできない」「常に助けが必要」「不幸である」というイメージだったものが、受講後には、「僕らと同じ普通の高校生」「ただ普通より時間がかかるだけ」という認識に変化が見られた。また、「障害がある人の負担を減らす為に僕らの世代に何ができるのが、真剣に考えさせられた」「身近なもので、どんなものが障害となりうるのか、今一度考えてみたい」等、自分ができることを考究する受講生が多かった。

以下、それ以外の生徒の感想を紹介する。

【肢体不自由・車椅子生活のイメージの変化】

<受講前>

- ・肢体不自由と聞くとみんな同じ。
- ・車いすに乗っていると何もできない。
- ・助けなきゃと思っていた。
- ・人より不幸と感じている、傷つきやすい。
- ・きつとつらい思いをしているはず。
- ・障害者に特別に気を遣ったり、壊れやすいものに触れるかのように接する。

<受講後>

- ・同じ肢体不自由であっても、みんな全く違うということが分かった。
- ・考えていることや友達同士のコミュニケーション等ほとんど自分たちと変わらない。

【気づき】

- ・“気づかないこと”が障害の本質。
- ・過剰な気遣いは、我々の障害者に対する勝手な想像がそうさせているのだ。
- ・僕らが「彼らは障害がある」という認識を持ってしまい、その前提で物事を考えてしまっているだけだと分かった。
- ・時間があるときにゆっくりと相手の要求に応えるというのは、大切だと思った。
- ・二つのことを同時にするのが苦手で嘘をつくことができないというのには、とても驚いた。
- ・「運動をしたい」などと思っていることを初めて知った。
- ・教科書のデジタル化や、板書を写真にとることの利便性はよくわかった。
- ・多くの人が形式にとらわれることなく学ぶことができる環境づくりに、ITが大きな意味を持つことの実例が聞けて良かった。

2.9.重度発達障害・病弱教育

【第6回 10/15】3～4限

都立墨東特別支援学校いるか分室

佐藤 比呂二先生

「自閉症の子どもたちとのかかわりを通して」

「小児がんの子どもたちとのかかわり」

佐藤先生は以前本校生徒が治療のために転校した際の担当教諭であり、いるか分教室以前に重度発達障害の特別支援学校教諭を長年勤めた経験があった。昨年の受講生の筑波大学附属以外の特別支援学校の障害教育も取り入れたほうが良いとの意見を反映させ、今年度依頼した。

<講義内容> (配布資料のタイトルから)

「私の出会った子どもたち」「目に見える問題行動と、目に見えないホントの願い」「発達・障害・生活の視点」「子どもを丸ごととらえる」「折り合いをつける力」「感情の育ちは受け止められてこそ」「支えられる存在から自らを支える存在へ」「子どもを変えるのではなく、子どもが変わる」
「病弱教育の現場から」「願いから生まれた いるか分教室」「笑うことを取り戻す」「生き方の変化：妥協して生きる→今を全力で生きる」「子どもと子どもをつなぐ」「病気になった生活を“消したい日々”ではなく“語れる日々”に」

今回の講座は、親と離れて暮らす重度の発達障害がある子どもたちの話を中心であった。自傷の恐れがあるため、ずっと手足を離すことができなかったC君が、佐藤先生による受け止められる経験を通して徐々に成長していく姿を、長年かけて記録した動画を交え、話があった。

また、病弱教育では、文部科学省でさえ把握していない「高校の院内学級」の深刻な現状やピアサポートによって支えられていること等が語られた。

受講生は、佐藤先生がマジックで場を和ませテンポよく話す姿、C君の目に見えない「ホントの願い」を探り、受け止め、子どもの力を信じて支え続ける姿に感銘を受けていた。

受講後の感想をみると、自閉症にみられるパニックや問題行動の背景、対応への理解が深まる記述が見られた。中には、C君が本当の気持ちに反して行動してしまった後の歯がゆい気持ちに共感を示す受講生もいた。

今回は筑波大学附属特別支援学校の児童・生徒とは違った特別支援の現状を知ることができた。また、目に見えない「ホントの願い」や「受け入れると受け止める」の違いを考慮した対応の仕方等、障害の有無にかかわらず、人間関係を築く上でも重要な視点を学ぶ貴重な機会となった。

以下、それ以外の生徒の感想を紹介する。

【認識・理解】

- ・自分の存在に対する肯定感を得るということは、色々な人が一緒に生きる上で大切であり、大きな意味を持つことがわかった。
- ・“いわゆる問題”を本人はわかっているし、大人が変えようとしても意味がなく、本人が自分自身を肯定できて、初めて自分から変わることがわかった。(自分にも当てはまる)
- ・自分の思いを相手に伝えられなかったり、周りの環境が理解できずパニックになっていることがわかった。
- ・一番困っているのは本人で一番変わりたいのは本人。本人が変わるには周囲の支えだけでなく、新しい自分に出会ったときの発見と自己肯定感が大切だということがわかった。
- ・すべての行動に意味があり、こちらの言葉もわかってくれるということがわかった。

- ・できたことを褒めるだけでなく、本人がそこに至るまでの過程を大事にし、たとえやらなくてもやらないと決めるまでに考えたことに意味があるという考え方を学んだ。

【気づき】

- ・自分の観点という枠組みだけでは絶対にわからない相手の立場があることを思い知らされた。
 - ・社会一般の常識を押し付けず、同じ目線で考えて、克服できるように支えていくことが大事。
 - ・自閉症のパニックが起きないためにどんな手段をとればいいのかと考えるとするのは短期的なものの見方、強要せず急がない精神を持たないと物事を多角的に捉えられないと知った。
 - ・普段は相手の目に見えることばかり見てしまっているから、相手の目に見えないことも考えて、共感するようにしたい。
- 【疑問・質問】
- ・特別支援学校教員の研修の場はあるのか？
 - ・「受け止める」「受け入れる」は区別するどのように身に着けたのか？
 - ・パニックがコミュニケーション手段だと勘違いしてしまっていたら、どうすればよいのか？
 - ・受け止め寄り添うのは葛藤やストレスも多いのでは？どのように乗り越えているのか？
 - ・笑うという行為が、彼らの心にどのように響いて、彼らの「自分で変わる」成長につながっているのか知りたい。
 - ・現在、自閉症や知的障害の教育現場の問題点などはあるのだろうか？
 - ・卒業後、どのような場で働くのか？

3 本講座の発展的な活動

講座以外でも障害のある人と直接かかわりたい・話したいと希望する受講生が年を追って見られるようになった。また、受講生以外にも、講座の内容や活動に関心を見せ、担当者に声をかける生徒も増えてきている。さらに、本講座のテーマをさらに深く研究する生徒（高3）も出てきた。次に、本講座以外の発展的な活動について述べる。

3.1 黒姫高原共同生活

2015 年から筑波大学学校教育局主催による附属学校群（特別支援学校 5 校、普通校 6 校の計 11 校）の児童生徒（希望者）が集い、寝食を伴う交流活動・共

同生活を実施している。

今年度は 3 か年計画の 2 年目である。

なお、全行程の企画・時程の検討や安全性・留意点の確認等々は普通附属と特別支援の連携推進委員会で話合わせ、本校からは濱本副校長及び筆者が委員として参加した。実施内容は以下のとおりである。

目的：共同生活の準備と実践を通して多彩な交流活動を展開し、合理的配慮の大切さを学びながら個性の尊重と伸張を目指す

場所：黒姫高原（黒姫ライジングサンホテル）

日程：7 月下旬の 3 日間（2 泊 3 日）

【黒姫高原共同生活の特色】

- ①学校種、障害の有無、障害種、異年齢、性別を越えた参加者。筑波大学附属学校ならではの企画。
- ②黒姫高原にて 2 泊 3 日で実施
- ③異年齢・障害の有無にかかわらず、相互にかかわりを持ちながら、共通の目的に向かって活動に取り組む内容が満載。
(交流活動内容)
バスレク、オリエンテーリング、野外炊飯、アイスクリーム作り、森のアドベンチャー、お土産づくり、キャンプファイヤー、ナウマンゾウ博物館見学等。
- ④各学校の代表による生徒実行委員会を設け、企画・運営、しおり制作は生徒が中心に行うことができる。

参加者の募集は①高校掲示板へのポスター掲示及び学級担任によるアナウンス②「ともにいきる」講座のオリエンテーリング時に【黒姫高原共同生活の特色】をアナウンスした。

附属学校では聴覚・大塚・桐が丘特別支援、中・高・駒場高・坂戸高（2016 年度は附属小学校も）が参加し、全体の人数は、2015 年度 53 名、2016 年度 73 名であった。

本校生徒の参加者は 2015 年度 11 名、2016 年度 9 名で、そのうち 2 名は 2 年続けて参加した。

日程	本校参加者（教員引率は 3 名）
2015. 7.28-30	11 名 高 1-2-3 年（0 名-10 名-1 名）
2016. 7.27-29	9 名 高 1-2-3 年（1 名-05 名-3 名）

表 2 黒姫高原共同生活の参加者数（2015-2016）

この黒姫共同生活は、これまで2校間での交流しかなかった附属学校が一同に会し、ともに活動する場として初めての試みであった。事前の生徒実行委員会の時から、特別支援学校の児童生徒たちは、自分の障害をより深く理解してもらいたいという気持ちを伝えてきた。

今回の黒姫の企画は、バスで移動し、寝食を共にするからこそ見えてくる距離感、手助けの必要/不必要の場面、同じ障害であっても人によって配慮の方法が全く違うこと等を、肌で感じる良い機会となったと考える。また、本校生徒においては、同室の児童に、朝の起床や集合時間、物品の管理等の場面では助けられる側になることも多かった。また、聴覚に障害がある生徒が、大塚特別支援学校の児童とともに活動し「自分は障害があるのでいつもサポートされる側だと思っていたが、自分もサポートできることがわかった」と感想を述べていたことが印象的である。これらの経験は、境界線のひき方によっては、障害がある人/障害がない人の二項対立だけでなく、支える側/支えられる側、できる/できない、等のいつでも自分が属している立場が異なる立場になりうるという体験につながったと考える。

以下、参加者の活動の様子を紹介する。

【生徒実行委員会】

各学校の有志が集まり、生徒実行委員会を立ち上げた。2015年度は、普通附属高校（高校・坂戸・駒場）と聴覚特別支援学校の生徒が実行委員であった。会議の情報共有は、板書とともに、生徒実行委員によるパソコンとテレビ画面を活用した同時通訳で、誰でもわかりやすく議事進行がわかるような工夫をしていた。一方で、細かなやりとりを健聴者同士でしてしまうシーンもあり、多くの課題も残った。

2年目は、委員長に聴覚特別支援学校の生徒が就任し、また、大塚特別支援学校中等部生徒も実行委員に加わった。2年続けて実行委員になる生徒も多くおり、交流をより充実させようと、色々とアイデアをもちより、企画準備をしていた。同じ学校だけで固まらないような工夫も見られ、障害の有無や年齢の垣根を超えた充実した交流及び共同活動の場となっていた。

【事前交流会】

2年目は、合宿2日前に生徒実行委員会主催の事前交流会を実施した。当日は、各校の紹介やアイスブレイク、名刺交換を行い、合宿初日の不安感・緊張感を

和らげるのにとっても効果的であったと考える。司会進行であった本校生徒は、当日の流れが誰でも分かりやすいようにプログラムの作成をし、文字の大きさや漢字にルビを振る等、参加者に対する配慮が見られた。

【しおりづくり】

初年度、生徒実行委員長（本校生徒）が中心に、大塚特別支援学校及び桐が丘特別支援学校の先生方のアドバイスや修学旅行のしおりなどを参考に作成した。事前に大塚特別支援学校へ訪問し、参加する生徒と交流し、しおりの作成に役立てた。表紙・裏表紙を大塚特別支援学校に依頼し、中には手話一覧を加え、誰でも読みやすいようルビをふる等、創意工夫を凝らしたものができた。特に大塚の児童生徒の独創的でのびのびとした色使いの絵がしおりの仕上がりを引き立たせていた。

【合宿中】

参加した本校生徒は、同室になった障害がある児童生徒への配慮やコミュニケーションの仕方等、引率した先生方から具体的なアドバイスを受け、さらに個別に専門的な話を聴く様子も見受けられた。泊まった宿は段差も多く、車椅子生活の参加者にとっては、バリアフリーとはいいがたい宿泊地であったが、だからこそ、階段での配慮を考え、舗装されていない場所での移動の困難さを実感するよい機会となった。参加者全員が、すべての企画を同じ目的をもって一緒に取り組む活動は、自然と支え支えられの関係性を築く交流活動となり、結果「楽しかった」という声になったと考えられる。

【事後の交流】

2年目の合宿後の夏休み中に、聴覚特別支援学校のある市川や本校などを拠点に、プライベートでも交流する姿が見られた。本校に来た際には、興味があったが黒姫共同生活には参加できなかった生徒が合流して、校内案内をしている様子があった。また、手話を学びたいと考える生徒が増え、「手話同好会」を立ち上げる動きも見られた。

文化祭では、各学校の文化祭（9-11月）へ行く生徒が多く見られた。また、本校にも多くの参加者が来校し、本校生徒の案内で各団体の展示や演劇、パフォーマンス等を見て楽しんでいた。桐が丘特別支援学校と大塚特別支援学校の小学部・中等部のメンバーは保護者とともにきており、黒姫の仲間との再会を楽しんでいた。

【参加生徒の感想】

以下、本校参加者（2015年度）の感想である。

＜宿泊で実施することについて＞

- ・長時間一緒に活動できるのでよい
- ・実生活での障害が生々しく伝わる
- ・一日中、一緒にいると分かることが多い
- ・より素で触れ合える

＜後輩へのメッセージ＞

- ・先生方がとてもフランクで、何でも話してくださるので、疑問に思ったらなんでも聞いてみるとよい。
- ・黒姫だけで終わることほど無意味なことはない。せっかく触れ合えるチャンスを生かして。
- ・とてもいい経験だった。後輩は宿泊行事だからと言って、遠慮せずに参加してほしい。
- ・本校にいと基本的にも均質な空間で生活していると、知らない世界に触れることで痛感させられる。僕は今の段階で痛感させられてよかった。
- ・同じ学校で固まらず、能動的に。
- ・一緒に生活することで、自分の偏見は打ち砕かれるので、より障害について理解できるようになる。楽しかった。

3.2 附属大塚特別支援学校訪問（希望者）

2015年度の黒姫共同生活前に、大塚特別支援学校小学部の事前学習会に参加した。学習会では2泊3日のスケジュールを時計やシールを使って確認することや自己紹介の練習があった。本校から参加した3名の生徒も一緒に作業に参加した。事前の顔合わせは、大塚・本校の双方にとって、不安を和らげることができ、有効であった。

3.3 附属桐が丘特別支援学校訪問（希望者）

2016年度は、「ともにいきる」受講生及び黒姫高原共同生活参加者（希望者）で、桐が丘特別支援学校を訪問した。目的は、車椅子生活の発展的学習及び黒姫共同生活の事前学習である。

黒姫高原共同生活の引率者である小学部石田周子先生より、学校生活の様子や介助するときの心構え、子どもたちの将来の夢や保護者の気持ちについて、お話を伺った。そのあと、車いすの仕組みや開閉方法を学び、段差のある場所、校内のスロープやエレベータの乗降、グラウンドなどを車椅子で移動する体験をした。

車椅子体験では、腕力が必要であること、少しの段差や凸凹が大きな障害になること、エレベータでの配

慮等を実感していた。また、黒姫高原共同生活への不安が和らぎ、心構えもできたようであった。

3.4 附属視覚特別支援学校 中学部 フロアバレー部の部活動に参加

補習として、5名の受講生が、視覚特別支援学校のフロアバレー部の練習に参加させていただいた。基礎的なルールややり方を教わり、その後部員と一緒に練習、最後は中学部 VS 駒場で試合を行った。体育の授業で行うバレーボールとは違い、ボールは床を転がしネットの下をくぐらせ、音や仲間の声を頼りに、レシーブを止めたり、ボールをつなぐフロアバレーを体験した。最初はなかなか声出しができず、うまくボールをつなぐことができず、部員から教えてもらうシーンもあった。参加者は視覚に障害がある人も一緒に楽しめるスポーツに関心を示したり、フロアバレーの魅力や楽しさを実感し、本校でもやりたい、との声も出た。

3.5 附属視覚特別支援学校 寄宿舎行事ボランティア活動への参加（よみうりランドの付添い）

2016年度の第5回講師の視覚特別支援学校寄宿舎指導員の飯島美帆先生より、寄宿舎行事「よみうりランド」への付き添いボランティアの募集があった。受講生へアナウンスしたところ、5名ほどが関心を示し、そのうち3名に決定した。現地では、誘導・手引きをしつつ、一緒に同乗した絶叫マシーン等自身も楽しんできた様子である。また、事後もLINEなどで連絡を取り合っているとの話を聞いている。

3.6 共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い

筑波大学学校教育局主催で「障害者スポーツの体験、パラリンピアン講演、そして附属学校生によるシンポジウムを通して、共生社会を考える」会が催された。平成28年度文部科学省委託事業「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)推進事業」の一環として開催され、約180名が参加した。そのうち、本校生徒は9名であった。

障害者スポーツにおいては、パラリンピック正式種目であるボッチャやアダプテッドスポーツ（障害者や高齢者、子どもなども参加できるように修正されたスポーツ）を体験した。ルールや道具の創意・工夫次第で、一緒に楽しむことができるスポーツを実体験する良い機会となった。

4 2015年度受講生の修了後の様子

4.1 受講生のプログラム修了後レポートより

本講座では、年間プログラム修了後、学んだこと・得られたこと・印象深かったこと等を記したレポート（A4一枚程度）を提出させている。またそれを受講生全員で共有するとともに、講師の方々にも読んでいただいている。

2015年度は2016年1月下旬に受講が修了し、2月中旬に提出させた。

受講生のレポートをみると、25名中4名は、本講座を志望した当初、「障害者について全く興味がなかった」「楽な講座だと思った」「消去法」で選択している非積極的選択者であることがわかった。そして、受講後には「障害という言葉に向き合う姿勢が変わった」「ゼミを通して障害について興味を持ち始めた」「偏見と真剣に向き合い、真剣に考えていくことが大事」「実際に障害者と触れ合うことは思っていたより障害者のことをより深く知ることができ、また机上の知識では知り得ないものがあり、当初の目論見とは違う形で満足」と障害に対する偏見や誤解がなくなり、障害に対する意識・態度に変化が見られた。この非積極的選択者の実態は第1期（2011）と同様で、本講座は一定数の非積極的選択者が存在することが明らかとなったと同時に、障害に関して興味関心のない受講生でも、様々な体験やそれぞれの視点からアプローチすることで、障害の本質を知り、障害（者）に対する意識や見方・捉え方は変化し、誤解や偏見がなくなり、これからの社会を考えることができるようになることがわかった。

その他、受講動機が非積極的・積極的にかかわらず、ほとんどの受講生が、本講座を通して、障害観が一変し、本講座で学んだ内容を社会全体でも共有することが必要であると感じていることもわかった。また「本講座から少しずつ障害者のマイナスイメージを変えていくことができると思う」等、障害理解の啓発の一つとして本講座の必要性を記述する受講生もいた。その他、「バリアフリーな世界の構築は健常者だけでなく、障害を持つ人の声を活かして進めないと意味がない」といった意見や、「どんな人も不自由なく暮らせる社会は国・世界単位での対応が必要」等、今後の社会に目を向け考究しはじめている様子が窺われた。

以下、それ以外の生徒の記述を紹介する。

【障害に対する認知・理解を述べたもの】

- ・「ともにいきる」とは「ともに考える」こと。
- ・交流会を通じて、彼らが私たちと同じく人間であり、また私たちと同じく他人の手助けなしでは生きていけないことを知った。
- ・過剰な手助けは彼らにとっても不必要で、彼ら自身の障害の捉え方は「障害」ではなく、「ハンデ」であると直感的に感じた。人それぞれハンデの種類・程度が違う以上、手助けの必要・不必要の線引きも異なると知った。
- ・障害は未知の世界だ。どんなに勉強しても未知の世界に接するところまでしかできず、中に入ることはできない。健常者が作るバリアフリーな世界は、ある意味自己満足の塊かもしれない。障害を持つ人こそがバリアフリー化を進めなければ意味がないと思った。
- ・関係ないものをすべて切り捨てて、効率化を追求しすぎるのは危ない。細部を追求しすぎても答えが見つからないことがあるとの考えや、当事者を招いて様々な視点から目的の達成を試みようとする考え方を知った。

【ともにいきる社会の実現に向けて提案を述べたもの】

- ・障害者に合わせる、健常者に合わせるという考え方でなく両者の距離が縮まっていくこと。
- ・障害に関するマイナスイメージを変えていくこと。障害者の人々と交流し、もっと障害について知ることが必要。
- ・どんな人も不自由なく暮らせる社会。解が一意に決まる問題ではないと思うし、そんなものは存在しないのかもしれないが、それに向かって努力することは絶対に必要なことだ。
- ・障害というテーマは本当に多くの要素を含んでいて、かつ個人差が大きいので簡単に”解決”することは絶対にできない。だからこそ、もっといろいろなことを知らなくてはならない。

【今後の自分の在り方を述べたもの】

- ・この先、機会があればもっと深く広くかかわることができるようになりたい。
- ・知らず知らずのうちに自分と関係のないと思い込んだものを切り捨ててしまっていた。自分の日々の行動を考え直してみようと思った。
- ・「障害者」と聞いて思考停止するのではなく、相手のことをよく知ろうとし、自分にできる範囲でその相手にとって必要な手助けができるような姿勢を持ち続けていきたい。

【自己理解を述べたもの】

- ・この一年で障害に対する考えは今までとは確実に変わった。ゼミを受けるまでは障害を持つ人を見て見ぬふりをしていた。そのほうが気を遣わず、快適な生活が送れるからである。でも、もう目をそらすことは許されない。
- ・「視点をより広く持つ」ことができるようになった。
- ・障害の定義は意外とあいまいなものである。要は物差し、基準の問題であり、「社会が障害を作っている」のであると考えるのなら、自分はおろか誰であっても障害者となりうるのではないか。その社会は会社かもしれないし、バイト先かもしれない、あるいは相手の顔も見えないチャット上かもしれない。井の中の蛙がまだ見ぬ大海を知って恐れおののくこと、そして、自分が井の中にいることを自覚した。

【本講座への意見を述べたもの】

- ・今回交流した「障害者」はすべて筑波大学附属系列のエリート的な人々であった。そのエリートとちょっとだけ交流してその全てを知ったつもりになって「別に何も考えなくても普通に他人に接するようにしていれば、全然いいじゃん」というのは何か違うような気がする。

4.2 1年後の振り返りアンケート

本講座の見直し、及び受講生の障害（者）の理解、見方・捉え方の変容、プログラムの満足度等を知ることがを目的とし、2015年度の年間プログラムを受講した生徒 25 名を対象に 1 年後の振り返りアンケートをした。2016 年 12 月に実施し、有効回答 21 名（84%）であった。

アンケートの内容は下記のとおりである。

「ともに生きる」講座を受講して、

1. 障害（者）に対する7つの質問
 - ①認知や理解が深まりましたか？
 - ②基本的な知識が深まりましたか？
 - ③最先端の知識を得られましたか？
 - ④今後生活で役に立つ知識・体験はありましたか？
 - ⑤新たな発見はありましたか？
 - ⑥気づかなかった自分の発見はありましたか？
 - ⑦見方や捉え方、考え方は変わりましたか？
2. 講座全体の満足度は？
3. 今後も開講したほうがよいと思う講座は？
4. 印象的な話や体験

5. 受講してみて良かったこと
6. 思っていたより大変だったこと
7. 改善点、推奨したいテーマ・内容等
8. 感想・意見、自分自身の気づきや変化（4-8は自由記述）

4.2.1 アンケート結果

1. 障害（者）に対する理解や変容に関する質問項目は「はい・いいえ・どちらでもない・忘れた」の四者択一で回答を求めた。

(名)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
はい	21	21	14	19	20	14	19
いいえ	0	0	2	0	0	2	0
どちらでもない	0	0	4	2	1	4	1
忘れた	0	0	0	0	0	0	0

表1 理解や変容に関する質問項目 回答人数

「最先端の知識」及び「気づかなかった自分の発見」については、他の項目に比べて「いいえ・どちらでもない」と答えた受講生が多かった。

2. 講座全体の満足度

「非常に満足している・満足している・まあまあ満足している・満足していない」の四者択一で回答を求めた。その結果、非常に満足している9名、満足している12名であった。よって、回答した受講生全員が「ともに生きる」講座に満足していることが明らかとなった。

3. 今後も開講したほうがよい講座

約半数の受講生が今後も開講したほうが良いと選択した内容は、擬似体験と交流であった。

4. 印象的な話や体験について

1 年後も記憶に残る印象的な話や体験は、擬似体験（難聴、弱視）5名、交流〔聴覚、視覚、大塚（知的）、桐が丘（肢体不自由）〕5名、障害者からの話〔（福島智先生（全盲聾、東大先端研教授）、熊谷晋一郎先生（脳性麻痺・小児科医、東大先端研特任講師）、A君（高2）〕3名、児玉龍彦先生（本校卒業生、東大先端研センター長）の話、A君の父・兄の話であった。

その他、「障害なのは社会であって『いわゆる障害者』

ではない」や『障害』か『障がい』か『ハンデ持ち』と呼ぶかは大した話ではなく、我々がどうかかわっていくかは、もっと違うところが大事である」の記述が見られた。

5. 期待の外、受講してみてよかったこと

元々期待していた、満足、全部期待通り、素晴らしかったとの声が多かった。その他、受講してよかったと思った内容を一部紹介する。

- ・日本ろうあ連盟協会制作映画「ゆずり葉」
- ・東大先端研の福島先生、熊谷先生、児玉先生の講演
- ・交流によってより身近な存在として認識できるようになったと思うこと
- ・様々な立場の方からお話を伺えたこと
- ・車椅子体験、擬似体験（難聴、弱視）

6. 思っていたより大変だったこと

一番回答が多かったものは、毎回の授業後（もしくは欠席の際）のレポート（6名）であった。その他、交流（視覚特別支援学校、大塚特別支援学校）、難聴擬似体験、大学の先生の話を楽しみと感じる受講生もいた。「価値観が変わるときに感じる衝撃」が大変であったとする受講生もいた。

受講生は理系・文系・コミュニケーションの得意不得意等々、多様性があり、受け止め方もそれぞれであることがわかる。その意味からも、様々な立場・視点からの話や、擬似体験、交流の3部構成は、受講生にとっても、有効であったと考えられる。

7. 今後、改善したほうが良い点

本プログラムに対して、「どれもよかったので削るのは良くない」という意見や、「将来医者や技術者になる人が多いので、“障がい”への技術的なアプローチ（例えば義手義足新システム）」等の具体的な意見もあった。また、「筑波大学附属特別支援学校（エリート）以外の外の世界を知る機会を設けたほうが良い」との意見も見られた。その他、「もっと議論をする形式」「自分でテーマを決めて詳しく調べる」等、能動的に学ぶ機会も必要という意見もあった。

<具体的な提案>

- ・精神障害や後天的な障害等
- ・手話の体験
- ・桐が丘特別支援学校との交流
- ・交流の時に筑駒側もパフォーマンスを用意

8. その他、意見・感想など

「障害者に対する見方は完全に変わった」「貴重な体験のできる、授業では学ぶことができない内容で満足している」との感想が多く見られ、「後輩のためにも継続して開講してほしい」との意見もあった。「今後も継続して自分なりに障害にかかわってみたい」「大学では手話を学ぶ予定」の受講生もいた。

その他、受講生のコメントを一部紹介する。

- ・「かわいそう」という気持ちを抱くことは全くなくなった。（2名）
- ・障害のある人と交流し、考えを深められ、良かった。（3名）
- ・社会・自分について考えることができた。
- ・体験を伴った知は長く残るもの。
- ・「やさしさ」は勝手に健常者が作ったもので、もっと広く見ないと結局は分かり合えないと知った。

4.3 2016年度高校3年次課題研究

本校カリキュラムの改定により、2016年度から高校3年次が選択履修する「理科課題研究」/「課題研究（学校設定科目）」（1単位）が開講された。科目を履修する生徒は、高校2年次の課題研究で学んだことを基盤に、自ら研究テーマを決定し、指導教員の助言を得ながら探求心を持って研究を進める。

初年度（2016年度）の履修者は、2015年度に「ともにいきる」を受講した生徒25名のうち3名で、黒姫共同生活に参加した生徒であった。研究スタイルは、黒姫高原共同生活の参加者へのインタビュー、文献を調べる、多文化共生に関するNPO団体で活躍する卒業生にレクチャーを受ける等、さまざまであった。

3名のテーマは以下のとおりである。

- ・「多文化社会を生きる」
- ・「障害者とエンターテイメント」
- ・「高2障害科学ゼミナールと高3課題研究を履修し感じたこと」

実際の文章の一部を紹介する。

● D 君「多文化共生社会を生きる」

「異なる属性を持つ人々は共に生きていけるのか」、そして「そのような多文化社会を生きる者はどのような態度で生きるべきなのか」という2つの問いが立った。(一部略)「自分は普通だ」と思っていれば、それ以上考える必要はない、それでよいのだろうか。(一部略)

人間だから 価値観・習慣が異なれば摩擦は生じる。それゆえ「異質」に感じる人との交流は摩擦の分だけエネルギーを必要とし、しんどい、面倒くさいと感じることも多い。その理由となる性質の違い、つまり自分の属性について考えることもエネルギーを使う。つまりこの社会を「多文化社会」として受け入れ、そこで生きていくことは、それだけで物凄くエネルギーを使うことばかりなのだ。故にそのような摩擦を避けるために相手を避けて 思考停止に陥ることもあるだろう。しかし、同時に私はこの摩擦、つまり個々のアイデンティティのぶつかり合いこそが「多文化社会」のいわば醍醐味だとも思う。勿論、エネルギーは求められるし、様々な属性を持つ「すべての」人と会って解り合うこともできないと思われるが、その中でも「自分は多数派だ」という曖昧な意識に逃げずに「すべて」とはいかなくとも様々な人 たちとの交流を続けていき、自分の価値観を更新し続けていくことが、「多文化社会」を生きる我々全員にとって大事だと私は思う。

● E 君 「障害者とエンターテイメント」

「インクルーシブな社会」の実現に向けて、さまざまな障がいテーマとしたエンターテイメント作品である「バリバラ」と「浦河べてるの家」から考察していく。「バリバラ」(NHK)とは「バリアフリーバラエティー」と題して、「生きづらさを抱える全てのマイノリティー」のためのバラエティ番組。障害者自らが「笑いを取りに行く」というもの。一見過激にも見えるこのコンセプトではあるが、(その是非はともかくとして)人をバカにしたり、自らの欠点のある種自虐的に「ネタ」にして笑いを取るという「障害者を笑う」=「ポリティカル・コレクトネス」的にはタブーであるコンセプトが、「過激」なものでなくなったとき、初めて本当の意味でのインクルーシブな社会と呼べるとも言えるのではないだろうか。(一部略)これからのインクルーシブな社会において、「障がい」を「背が高い・低い」といった元来からの特徴の一部として、

演出や構成において効果的に使ったエンターテイメント作品が増えることは確実と言ってもよく、これらの演出が日常的に見られるようになったとき、新たな可能性が更に生まれるのではないかと期待している。

● F 君 「高2 障害科学ゼミナールと高3 課題研究を履修し感じたこと」

障害者というのは都合がいい。これが僕の出したあまりに単刀直入な結論だ。(一部略)都合が良すぎて感動ポルノにされることだ。頑張っている障害者を見て、自分も頑張らなきゃいけない。とコメントすることも思うことも、教育の賜物だとおもう。(一部略)みんなが平等に暮らす社会を目指す傍らでこういった状況があるのはどうしても矛盾を感じざるを得ない。明らかに障害者を特別視し、あるいは見下すような状況が存在しているような気がする。「自分も勇気をもらった」まで昇華するのはなかなかなことではないだろうか。みんな美談が好きなのだ。美談にしたがるのだ。でも、世の中美談のかけらもない。そんな定型句に自分の感想を押し込めるのはもったいない。素の気持ちを大事にしてほしい。障害者を美談としてまとめてしまった時、本当に知られるべき実情はその陰に隠れてしまう。ありのままを知って、それに対して何かを考えることが未来の日本を担う筑駒生の使命であろう。決して着飾ってはならない。障害者について深く考えることを避けているようにも思われるのだ。障害者に対して負の感情を抱くことは忌避とされる。障害者配慮は正義である、障害者は無条件に助けられるべき存在である、とフレームを作って障害者に接しているのではないだろうか。

筑波大系列のエリートな方々(一部略)このゼミを通して障害者が普通の人と同じようなものだと安易に解釈してしまうのは本当に危ないことだ。世の中発声できない聴覚障害者や口話ができない聴覚障害者がいるなんてこの講座だけでは思えない。言うことを全く聞かず暴れるような自閉症の子や全く身動きのとれない肢体不自由の子がいるとも思えない。それにもかかわらず、これから先会う可能性があるのは、そういった人たちである。(一部略)

障害科学は発展性のあるテーマだ。筑波大系列は全ての障害種別の特別支援学校を附属学校に持つ。筑波大系列にいるのだから自主的に深めることもできる。この学校で障害科学を学ぶのにこの環境を活かさないのはもったいないことだ。単純に障害のことを知るだけでなく、どんな人がどんな考え方を持っているのか、

色々知ることにはできるはずだ。それを知れば、また新たな世界が開けることだろう。

5 考察

「ともにいきる」講座を受講した生徒は第1～4期で73名となった。彼らは何を学び、どのように考えたのか、また、どのような発展・影響があったのかをまとめることは、今後、本講座を継続するうえで重要であると考えた。

今回は2011年度から開始した「ともにいきる」講座を多面的に振り返り、各講座の感想や日常生活、アンケート等からみる受講生の変容、そして、講座以外の発展した活動について述べた。

5.1 学習機会を整備することの重要性

講座を開講してわかったことは、学ぶ場を整えることの重要性である。「気づかないことが障害の本質」との受講生の言葉にあるとおり、「気づくきっかけとなる場と機会」があれば、障害に対する偏見や誤解はなくなる。そして、障害がある人は健常者と等しく長所も欠点もある人間であること、障害と健常者という境界線を引いた二項対立で捉えるのではなく、人と人との関係はすべてオーダーメイドであることに気づく。このような取り組みが今後も必要であることを強く認識させられた。

5.2 プログラムを通しての受講生の変容

4期間を通して見えてきたものは、このプログラムを通して、受講生一人ひとりが、以下のように変容をしていることである。

- ・障害特性や特性に応じた配慮等の障害理解はもとより、障害と健常者という境界線を越えた交流・コミュニケーションを楽しみ、人間関係を築き始めていること。
- ・障害がある人の社会的障壁や社会的不利益の所在を理解し、現状の社会に目を向けて、これからの社会について考究し、自分にできることを模索し始めること。
- ・他者と向き合うことにより、自分自身を見つめなおし、自分の生き方を考えるようになること。

5.3 多様な方々との出会いが生み出す気づき

本講座は、複数の障害種を、講義・疑似体験・交流の3部で構成し、児童生徒・教員・卒業生・大学教授・

研究者・医者・社会人（経営者）・家族等のそれぞれの立場の方々から、教育・異年齢・同世代・社会・研究・医学の視点でアプローチを行った。講師はこの分野の第一線で活躍している方々で、講義内容も大学生や社会人教育のレベルの話であったことも本受講生の知的好奇心を高めていたと言えよう。

また、多くの方々との出会いは、様々な場面で「共通する部分」と「多様性や差異がある部分」に気づくことができ、障害への理解がなお一層深まったと考える。

「共通する部分」で言えば、障害に対する考え方について、柳氏の「ろう者であることを障害と思ったことは一度もない。だけど障害者であることを受け入れている」⁴⁾⁵⁾、や熊谷晋一郎先生の「医学モデルと社会モデル」⁵⁾、また2.9.2のA君やB君の障害の受け止め方等、impairment（機能障害）を当人は障害と受け止めてはならず、真の障害は、社会におけるdisability（能力障害）であり、handicap（社会的不利）であるという「社会が障害を作っている」との共通性が見えてくる。これはそれぞれの立場の方から繰り返し聴いた内容で、障害者の社会的障壁や社会的不利益について深く考えるきっかけになっていた。

「多様性や差異がある部分」においては、「障害」という言葉の書き方について、障害のある本人であってもまったく無関心である人、あえて「障碍」や「障がい」と書く人、「ハンデ」と捉える人等、考え方は多様であった。また、受講生側も同様の傾向がある一方で、『「障害」か「障がい」か「ハンディ持ち」と呼ぶかは大した話ではなく、我々がどうかかわっていくかは、もっと違うところが大事である』という考え方を生徒もいて多様性が見られた。

ハード面での環境整備についても、2.9.2のA君・B君やご家族から、歩道の点字ブロックは車椅子にとっては通行しにくい現状や、健常者が良かれと思った配慮が当事者にとってはあまり役に立っていないといった惜しい支援や社会の現実等を知り、物事を一つの障害や健常者からの視点だけで解決しようとしても、真の解決につながらないことに気づくきっかけとなっていた。受講生からも「簡単に”解決”することは絶対にできない。だからこそ、もっといろいろなことを知らなくてはならない」「健常者が作るバリアフリーな世界は、ある意味自己満足の塊かもしれない。障害を持つ人こそがバリアフリー化を進めなければ意味がない」と、物事を多様な視点から解決する必要であることや、解が難しいからといって目を背けるのではなく、障害

のある人とともに、一緒に考える視点が重要であることを学ぶことができたと考える。

その他、「発達障害」「肢体不自由」「聴覚障害」「視覚障害」・・・等、講義や擬似体験・交流の実体験から、同じ障害種であっても障害の程度は人によって違うこと、したがって、不自由さや必要な手助けは相手によって異なるということを知ることができたと思われる。このようにそれぞれの立場の様々な視点からのアプローチは、今まで気づけなかった「共通する部分」と「多様性や差異がある部分」についてより深く探究するきっかけとなっていたと言えよう。

5.4 障害のとらえ方の変容と、そのことが生み出す社会の見え方の変化

次に、障害（者）に対する捉え方の変化であるが、受講生の多くが「1年前とは確実に変わった」と感じていることがレポートや振り返りアンケートから明らかとなった。

受講当初の障害に対するイメージは「何もできない」「劣っている」「遅れている」「障害はデメリットしかない」「人より不幸」等の否定的な印象を持っており、「かかわるのが面倒」「手に負えない」と受け止め、自分とはかかわりのないこととして過ごしてきたことが窺われる。それが、本講座を通して、「援助が常に必要なわけではない」「自分でやりたいと思っている」「自分でできることも多い」「人より少し時間がかかるだけ」「僕たちと変わらない」「普通の高校生であった（肢体不自由・聴覚障害・視覚障害）」「周りの対応次第ではそれを「障害」ではなくすることができる（知的障害）」と障害に対する捉え方が変容したことがわかった。

そして、「自分達が勝手な思い込みで社会的に生きづらくなっている現状はおかしい」と感じ、「自分の観点という枠組みだけでは絶対にわからない相手の立場がある」ことに気づき、「短期なものの方ではなく、物事を多角的に捉える必要がある」「解が一意に決まる問題ではなく、存在しないかもしれないが、それに向かって努力することは絶対に必要なことだ」との視点で考究できるようになっていた。

また、「関係ないものをすべて切り捨てて、効率化を追求しすぎるのは危ない」ことや「細部を追求しすぎて答えが見つからないことがあり、当事者を招いて様々な視点から目的の達成を試みようとする」考え方を知り、普段必要ないものを切り捨てていた自分に気づき、これからの生き方を変えていこうとする姿も

見られた。

さらに、「『社会が障害を作る』ということは、逆に言えば『社会が障害をなくせる』ということだと思う。寄り添い、支援することで“障害”という言葉が存在しない世の中になるのではないかと、そしてそう願ってほしい」と願い、「市民一人ひとりがこのような講座の内容を学ぶことが大切」との意見や「国単位、世界単位での対応が必要である」と、社会や世界に目を向け、これからも目を背けずに生活しようとしていることが明らかとなった。

5.5 擬似体験・交流の重要性

これらの考えに至るには、本講座の中で、特に擬似体験と交流の存在が大きいと考える。1年後の振り返りアンケートの結果からも、擬似体験・交流は衝撃的かつ印象的な体験として記憶に残っており、来年度以降も継続したほうがよいとの声が多かった。受講生の保護者から、擬似体験や交流の様子を家庭で話題にしている、との声が届いた。普段、家庭で余計な会話はしない息子が自分から体験談を話すのだからよっぽど印象的でいい経験だったのだろうと、推測していた。受講生の振り返りでも「体験を伴った知は長く残るもの」とある通り、講義とともに擬似体験や交流等が組み合わさることが障害理解を深めるうえで有効であると考えられる。

2015年度以降は、講座外でも積極的に黒姫高原共同生活やボランティア活動やスポーツイベントなどに参加する者やプライベートでも交流を続けている者も増えてきている。また、校内で車椅子体験をする様子を見て、受講生以外の生徒が興味関心を示したり、手話の話題や指点字を活かした入力システムの話で盛り上がることもしばしばみられる光景である。さらに、本講座の交流会で大塚特別支援学校の児童が来校し、ともに活動したり、黒姫高原共同生活で一緒だった特別支援学校の仲間たちが校内で楽しそうに交流する姿を見かける機会が多くなった。その他、昨年は視覚が不自由な人の意見を取り入れつつ、音だけで楽しめるゲームを開発し、文化祭で発表する生徒もいた。保健委員会でも点字で歌詞カードの製作活動をする等、徐々に、障害が特別なことではなくなっている。

5.6 あらたな展開への期待

本講座の開講当初の目的の一つとして、ご家族・親戚に障害がある方の中には、周囲の無理解によりネガティブな思考になり、カミングアウト出来ずにいるこ

とに危機を感じ、この状況を改善することであった⁴⁾。この講座を始めてから、身内に障害がある、施設で暮らしている、自分自身が弱視・色弱である、以前に発達障害ではないかと言われた、自分にも自閉症の特性がある等、障害について話題にする生徒が出てきている。少しずつ、障害が特別なことでなく、障害について話しやすい環境づくりができていないのではないかと考えている。このような環境ができたことは、本講座の効果の一つであろう。

受講生の「障害というテーマは本当に多くの要素を含んでいて、かつ個人差が大きいので簡単に“解決”することは絶対にはないと思う、だからこそもっといろいろなことを知らなくてはならない」や、高校3年課題研究のF君の「障害というテーマは発展性がある」にもある通り、「ともにいきる」は様々な分野で発展できるテーマである。本校生徒は、建築工学・人間工学・医学の分野に進む者が多いので、義手義足新システム等、障害への技術的なアプローチへの展開も考えられる。また、より幅広い障害（精神疾患や後天的な障害等）を学ぶ、より多くの交流（桐が丘特別支援学校等）を行う、手話を学ぶ、各自が探求するテーマ研究をする、講義のみではなく議論する場等、いくつか具体的な意見もあり、様々な展開が可能であろう。

しかしながら、高校2年次の本講座で、多くのことから取り上げることは時間的にも余裕がないため、段階的に取り組む必要がある内容であろう。どのように取り入れていくかは検討の余地がある。

高校2年次の「ともにいきる」講座は障害を知る「入り口」である。筑波大学附属特別支援学校のように、先進的な教育がなされ、自立に向けた教育を受けている人ばかりではないことも忘れてはならないだろう。

今後は、障害のある方々の就労問題や社会生活に参加ができていない現状等、日本や世界の障害（者）の実態や先進的かつ理想的な障害理解とは真逆の社会の実態にも目を向け、今まで学んできたこととのギャップを知り、自分たちに何ができるのか、探究することも一つであると考えている。

6 おわりに

「2.5 人称の視点」

今後の活動を考える上で、柳田邦男氏の2.5 人称の視点⁶⁾を大事にしていきたいと考えるようになった。柳田氏は未来を考える思想と方法として2.5 人称の視点を提唱している。1 人称は事件や問題の被害者本人、

2 人称はその家族、3 人称はその問題にかかわる専門家や企業・役人とし、1、2 人称からの視点が抱える思いを大切にしながら、客観性と合理性を持つ冷静な3 人称の視点が必要である。そこで、相手に寄り添う心遣いを持ちながら、専門的職業人の勤めもこなす、「2.5 人称の視点」が大事であるとしている。

それを、障害者に置き換え、障害のある人（1 人称）や家族（2 人称）に寄り添う心遣いを持ちながら、障害に対する知性と感性をもって、行動していく、そんなぬくもりのある「2.5 人称の視点」が大切であると考えている。

本校生徒は卒業後、社会に貢献するべく様々な活動をする者がいる。政治・経済・法曹界・建築工学・人間工学・保健・医療・教育など多分野から、2.5 人称の視点をもって、障害（者）を取り巻く社会を変えていってほしいと筆者は期待している。

今回は本講座の感想・レポート・アンケート等をもとに考察を行った。ただ、彼らが、どれだけ実生活で実践できているかは計り知れない。記述を見る限りでの「障害を理解していること」と「日常生活でかわりがうまくいっていること」は等しい関係ではないことも念頭において、今後の講座の継続を検討していきたいと考えている。

【謝辞】

このゼミナール（課題研究）の実現に際しては、附属特別支援学校の先生方・児童・生徒および卒業生やそのご家族、筑波大学の宮本信也学校教育局長、柘植雅彦教授、東京大学先端科学技術センターの福島智教授、熊谷晋一郎特任講師、ありがとうございますの種&・Social Cafe・Sign with Me オーナー柳匡裕氏、都立墨東特別支援学校いるか分室佐藤比呂二先生、そして本校校長林久喜先生のご理解とご協力をいただきました。また、黒姫高原共同生活においては、本校副校長濱本悟志先生に、貴重なご助言とご支援をいただきました。皆様に心から感謝の気持ちとお礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

【参考文献】

- 1) 現代思想 2016.10 vol.44-19, 斎藤環 p50、48
- 2) 現代思想 2016.10 vol.44-19, 岡原正幸 p224
- 3) 現代思想 2016.10 vol.44-19, 杉田俊介 p.124
- 4) 早貸千代子他（2014）「障害科学ゼミナール「ともにいきる」の実践報告」筑波大学附属駒場中・高等学校紀要第 54 集

- 5) 早貸千代子他 (2015) 「障害科学ゼミナール「とも
もにいきる」の実践報告」筑波大学附属駒場中・
高等学校紀要第 55 集
- 6) 柳田邦男「2.5 人称」 日経新聞,2006 年 5 月